

妙法蓮華經安樂行品第十四（続き）（6月10日テキスト）

（いつも安らかな気持ちで進んで法を説く為の基本的な心得）

（246 頁 5 行～251 頁 10 行）

又文殊師利、如来の滅後に末法の中に於て是の經を説かんと欲せば、安樂行に住すべし。若しは口に宣説し若しは經を読まん時、樂って人及び經典の過を説かざれ。亦諸余の法師を輕慢せざれ。他人の好惡長短を説かざれ。声聞の人に於て亦名を稱して其の過惡を説かざれ。亦名を稱して其の美きを讚歎せざれ。又亦怨嫌の心を生ぜざれ。善く是の如き安樂の心を修するが故に、諸の聴くことあらん者其の意に逆わじ。難問する所あらば小乗の法を以て答えざれ。但大乘を以て為に解説して一切種智を得せしめよ。（246 頁 5 行～246 頁 11 行）

また文殊師利よ、如来が世を去った後、仏法が正しく保持されていない未来の世において、この經を説き広めようと欲する菩薩大士は、安樂な心構えを保持しているでしょう。自らの言葉で語る時も經典に説かれていることを説く時も、人の欠点や經典の誤りを言いふらすことはありませんし、また、諸々の他の法師を輕蔑したりすることはありません。また他人の善し悪しや、長所や欠点を説くこともありません。（欲望を滅して阿羅漢となって自らの涅槃のみを求める）声聞の人の名をあげてその誤りや欠点を言いふらしたりしませんし、逆に、その名前をあげてその美点を褒め称えたりすることもあります。また、怨んだり嫌ったりする心をおこすこともありません。この様な安樂の心を善く修得しているからこそ、諸々の聴衆は反感を持つこともありません。もしも、難しい質問をする者があった場合も、小乗（欲望を滅して阿羅漢となって自らの涅槃のみを求める）の教えによって答えることは無く、大乘（全ての衆生を悟りへと導く）教えによって説き、（聴く者が）仏の智慧に触れることができるように努力するでしょう。

爾の時に世尊、重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を説いて言わく、

菩薩常に樂って 安穩に法を説け 清淨の地に於て 牀座を施し 油を以て身に塗り 塵穢を澡浴し 新淨の衣を著 内外俱に淨くして 法座に安處して 問に随つて為に説け 若し比丘 及び比丘尼 諸の優婆塞 及び優婆夷 国王王子 群臣士民あらば 微妙の義を以て 和顔にして為に説け 若し難問することあらば 義に随つて答えよ 因縁譬喩をもつて 敷演し分別せよ 是の方便を以て 皆發心せしめ 漸漸に増益して 仏道に入らしめよ 懶惰の意 及び懈怠の想を除き 諸の憂惱を離れて 慈心をもつて 法を説け 昼夜常に 無上道の教を説け 諸の因縁 無量の譬喩を以て 衆生に開示して 咸く歡喜せしめよ 衣服臥具 飲食醫藥 而も其の中に於て 憊望する所なかれ 但一心に 説法の因縁を念じ 仏道を成じて 衆をして亦爾ならしめんと願ふべし 是れ則ち大利 安樂の供養なり 我が滅度の後に 若し比丘あつて 能く斯の 妙法華經を演説せば 心に嫉恚 諸惱障碍なく 亦憂愁 及び罵詈する者なく 又怖畏し 刀杖

を加えらるる等なく 亦擯出せらるることなけん 忍に安住するが故に 智者是の如く 善く其の心を修せば 能く安樂に住すること 我が上に説くが如くならん 其の人の功德は 千万億劫に 算数譬喩をもって 説くとも尽くすこと能わじ

(246 頁 11 行～248 頁 5 行)

その時に、世尊は、重ねてこの意義を述べようとして、次のように詩を説いて言われました 菩薩は常に穏やかな気持ちを保つことを心掛けて 清浄な所で 足の付いた四角い台を置き 油を体に塗り 塵にまみれた体を洗い清め 新しい清潔な衣服を着て 身も心も浄らかにして 法座にゆったりと坐り 質問に答えながら教えを説きます もし 出家の男女 在家の男女 国王 王子 様々な大臣 学識のある人々 一般の人々がいるならば 言葉を越えた気づきをもたらす話し方で 穏やかな顔で彼らの為に説くでしょう 難しい質問に対しても 彼らが分かるような話し方で答えるでしょう 理由や成り立ちが分かるように 譬え話を用いて 詳しく丁寧に人に応じて説くでしょう そのような巧みなやり方によって 皆に悟りを求める心を起こさせて 少しずつ良い結果が得られるようにし 仏の道を歩むようにさせるでしょう 怠け心や だらけた想いを取除き 心配事や悩み事に囚われる事なく 他者への思いやりの心で 教えを説くのです 昼夜を問わず常に この上なくすぐれた道の教えを説き さまざまないわれやなりたちを 数え切れないほどの譬え話によって 衆生に説き示し 悉く歡喜させるのです 衣服や寝具 飲食物や医薬などを目の前にして それらを欲しがることありません ただ一心に 教えを説くことの理由と意義に思いを馳せ 自ら仏道を成就し 多くの人々も仏道を成就することを願うことは 大いなる利益を(多くの人々に)もたらすものであり (私達すべてに) 安樂をもたらすものであることに思いを致すのです 私が世を去った後に もし男性出家者がいて 巧みに この妙法華經を説くならば 心に嫉妬や自分の心に逆らうものを怒り恨むことや 諸々の悩みや悟りの障害となるものもなく また憂いや悲しみ および口汚くののしる者もないでしょう また恐れることもなく 刀杖を加えられることもなく その人の現世来世に幸福をもたらすもとになる善行は 千万億劫の間 数えても例えても 説きつくす事は出来ません

又文殊師利、菩薩摩訶薩後の末世の法滅せんと欲せん時に於て斯の經典を受持し読誦せん者は、嫉妬・諂誑の心を懷くことなかれ。亦仏道を学する者を輕罵し、其の長短を求むることなかれ。若し比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷の聲聞を求むる者・辟支仏を求むる者・菩薩の道を求むる者、之を悩まし其れをして疑悔せしめて、其の人に語って汝等道を去ること甚だ遠し、終に一切種智を得ること能わじ。所以は何ん、汝は是れ放逸の人なり、道に於て懈怠なるが故にと言うこと得ることなかれ。又亦諸法を戲論して諍競する所あるべからず。

当に一切衆生に於て大悲の想を起し、諸の如来に於て慈父の想を起し、諸の菩薩に於て大師の想を起すべし。十方の諸の大菩薩に於て常に深心に恭敬・礼拝すべし。一切衆生に於て平等に法を説け。法に順ずるを以ての故に多くもせず少くもせざれ。乃至深く法を愛せん者にも亦為に多く説かざれ。

文殊師利、是の菩薩摩訶薩後の末世の法滅せんと欲せん時に於て、是の第三の安樂行を成就することあらん者は、是の法を説かん時能く悩乱するものなけん。

好き同学の共に是の經を読誦するを得、亦大衆の而も来つて聴受し、聴き已って能く持ち、持ち已って能く誦し、誦し已って能く説き、説き已って能く書き、若しは人をして書かしめ、經卷を供養し、恭敬・尊重・讃歎するを得ん。(248 頁 6 行～249 頁 10 行)

また、文殊師利よ、菩薩大士が、未来の世において、正しい仏の教えが失われそうになっている時において、この經典の教えを銘記して忘れず、唱え聞かせようとする者は、嫉妬心や、へつらいや、欺く心を懷くことはなく、また、仏の道を学ぶ（他の菩薩乗の）者を輕蔑したり、その長所短所を探したりすることもあります。もし、出家の男女、在家の男女で、声聞乗の悟りを求める者たちや辟支仏（独りで悟る）の悟りを求める者たちや、菩薩乗の悟りを求める者たちを悩まし、彼らの心を疑わせたり悔やませたりさせて、その人に話し、「あなた達は、仏道からはるかに離れている。結局は仏の最高の智慧を得る事は出来ない。理由は何故か」というと、あなた達は気ままに振る舞う人間であり、修行において怠け心があるからです。」などと言うこともありません。また、諸々の教えに関して無益な論争をしたり、競い合ったりすることもあります。ひたすらに、この世のすべての衆生に対して大きな慈悲の想いを起こし、悟りの世界から法を説いてくださる如来の方々に対しては慈しみ深い父親に対するような想いを起こし、仏への道を歩まれている諸々の菩薩の方々に対しては大師にたいする想いを起こすのです。十方の諸々の大菩薩に対しては常に深い心をもって恭しく敬い、礼拝するでしょう。あらゆる衆生に対して平等に教えを説くのです。教えに素直に従うかどうかで多く説いたり少なく説いたりすることもあります。あるいは深く教えを愛する者にも、だからと言って多く説くことでもあります。

文殊師利よ、この菩薩大士が、未来の世において、正しい仏の教えが失われそうになっている時において、この第三の安樂行を成し遂げる者は、この教えを説くとき、悩ましたり苦しめたりするものはいません。

自ら好んで一緒にこの經を唱え聞かせる仲間が現れ、大勢の人々が教えを聴きに来ましょう。それらの人々は、その教えをこの人から聴き、よく銘記して忘れず、銘記して忘れず暗誦したことを人々にも説き、説き終ったら書写し、他の人々にも書写するように勧め、經卷として大切にお供えし、恭しく敬い、尊重し、讃嘆するようになるでしょう。

爾の時に世尊、重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を説いて言わく、

若し是の經を説かんと欲せば 当に嫉恚慢 諂誑邪偽の心を捨てて 常に質直の行を修すべし 人を輕・せず 亦法を戲論せざれ 他をして疑悔せしめて 汝は仏を得じと云わざれ 是の仏子法を説かんには 常に柔和にして能く忍び 一切を慈悲して 懈怠の心を生ぜざれ 十方の大菩薩 衆を愍むが故に道を行ずるに 恭敬の心を生ずべし 是れ則ち我が大師なりと 諸仏世尊に於て 無上の父の想を生じ憍慢の心を破して 法を説くに障礙なからしめよ 第三の法是の如し 智者守護すべし 一心に安樂に行ぜば 無量の衆に敬われん(249 頁 10 行～250 頁 7 行)

その時に、世尊は、重ねてこの意義を述べようとして、仏徳を賛歌して詩を説いて言われました。

この経を説こうとするものは 嫉妬心や腹を立てることや高慢さや へつらい心や欺く心やよこしまな心や偽りの心を捨てて 常に正直で誠実な行いを修めるでしょう 人を輕蔑せず また教義への無益な言論を慎み 他人を疑わせたり悔やませたりさせて 「あなたは仏に成ることはできない」と言ったりしません この(仏に代わって教えを説く) 仏の子が教えを説くときは 常に柔和であってよく耐え忍び すべての者を慈しみ 怠け心を起こすことはありません 十方世界の大菩薩の方々は 人々を慰むが故に仏道を行じておられることを思い 恭しく敬う心を起こすのです この人々はすなわち私の大いなる師であると 諸々の仏や世尊に対しては この上ない父であるという思いをおこし そうしてあらゆる驕り高ぶった心を打破すれば 教えを説くのに障害となるものは無いのです 第三の教えとはこのような心構えなのです 智慧のある者はこの心構えを守り保つのです そのように一心に安樂に行じるならば 数え切れない人々に敬われるでしょう

又文殊師利、菩薩摩訶薩後の末世の法滅せんと欲せん時に於て法華經を受持することあらん者は、在家・出家の人の中に於て大慈の心を生じ、菩薩に非る人の中に於て大悲の心を生じて、是の念を作すべし、是の如き人は則ち為れ大に如来の方便随宜の説法を失えり。

聞かず知らず覺らず、問わず信ぜず解せず。其の人は是の經を問わず信ぜず解せずと雖も、我阿耨多羅三藐三菩提を得ん時、随つて何れの地に在つても、神通力・智慧力を以て、之を引いて是の法の中に住することを得せしめん。文殊師利、是の菩薩摩訶薩如来の滅後に於て此の第四の法を成就することあらん者は、是の法を説かん時、過失あることなけん。

常に比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷・国王・王子・大臣・人民・婆羅門・居士等に供養・恭敬・尊重・讚歎せらるることを為ん。

虚空の諸天、法を聴かんが為の故に亦常に随侍せん。若し聚落・城邑・空閑・林中に在らんとき、人あり来つて難問せんと欲せば、諸天昼夜に常に法の為の故に而も之を衛護し、能く聴者をして皆歡喜することを得せしめん。所以は何ん、此の經は是れ一切の過去・未来・現在の諸仏の神力をもつて護りたもう所なるが故に。

(250 頁 8 行～251 頁 10 行)

また文殊師利よ、菩薩大士で、未来の世において、正しい仏の教えが失われそうになっている時において、この法華經の教えを銘記して忘れずにいようとする者は、在家や出家の人の中に於いては、大いなる慈しみの心をおこし、まだ菩薩ではない人々の中においても大いなる憐れみの心を起こして、次のように思うとよい。

「この様な人は、すなわちこれ大いに如来が用いるさまざまな方便や相手に応じて説かれる教えを自分のものとする事ができていない。聞かず、知らず、気づかず、問わず、信ぜず、理解しない。その人がこの経を問わず、信ぜず、理解しないとしても、私が阿耨多羅三藐三菩提(人々と共有できる最上最高の終わりのない悟り)を得たときには、彼らがどこに居よ

うとも、神通力と智慧力によって彼らを引きつけて、この教えの中に留まる事ができるようにしよう。」

文殊師利よ、この菩薩大士で、如来が世を去った後に、この第四の（安樂な行い）のやり方を完全に修得することができる者は、この（法華經の）教えを説くときにも過失があることはないでしょう。

常に出家の男女、在家の男女、国王、王子、大臣、市民、バラモンや有力者らに供養され、恭しく敬われ、尊重され、讃嘆されるのです。

虚空の天人達も、教えを聴くために常に後について仕えるでしょう。もしも、村や都市や人里離れた修行に適した場所や林の中にいるときに、人がやって来て難しい質問をしようとしたなら、天人達は昼夜常に教えの為に付き添い守り、聴く者に皆よく歓喜することを得させるでしょう。理由は何故かという、この教えは一切の過去・現在・未来の諸仏の神通力によって守られているからです。